

家庭学習や 習いごとから学ぶ 子育て



小倉郁子先生

2010年12月7日(火) 栃木県下野市立祇園小学校

中学受験を控え、習い事をやめしてしまう子も多い小学3・4年生。

ピアノ指導者として、この時期のお子さんをもつ保護者の方に

習い事を続ける意義をどのように説明されていますか？

今回はご自身の子育て経験・ピアノ指導経験を基に、小学3年生の保護者を対象に行われた小倉郁子先生の親学講座をレポートします。

小学3年生とは どんな時期？

今日お集まりの方々は3年生の保護者の方ですので、まずは小学3年生という時期が人の成長過程においてどのような時期なのかをお話させていただきます。

(1) 自分の頑張りを 認めてほしい

小学3年生というのは、自分を取り巻く親や先生、友達に認めてもらいたいという気持ちがとても強くなる時期です。彼らは自分が頑張っていることや出来るようになったことを周りに認めてもらいたい一心で努力をします。ですから、結果がどうあれ親がまずその頑張りを認めてあげることが「ほめる」ことに繋がっていきます。「ほめ方が分からない」「ほめるところが見つからない」という悩みをよくお聞きしますけれども、「ほめる」のではなく「認めてあげる」という風に考えて、こういう所が頑張れたねと声をかけてあげると、彼らはまた素直に努力を始め、非常

に大きな力を発揮するようになるでしょう。

(2) 体で学ぶ

次の特徴は、体で学ぶということです。全てのことに体当たりで取り組む時期ですから、生活体験が増え知識欲も旺盛になります。ですから、自然と「なぜ？」と思うことがたくさん出てきて、親に必ずその疑問をぶつけてきます。そういったときには、その質問から逃げずに受け止めて、ご自身の言葉で説明してあげていただきたいと思います。もし分かんなければ、親子で一緒に調べればよいのです。調べて一緒に謎を解明するという姿勢を見せると、子どもたちはとても安心し、満足します。

(3) 自己中心的である

3つ目の特徴は、「自分さえ良ければ良い」という考え方しかまだできない時期だということです。ですから彼らはいつも自己中心的な言葉を発してきます。そのこと自体はどのような時期なのですから仕方がないことですが、親としてはそれは決して良い考え方ではないということ

を教え続ける必要があります。その過程を経て、ゆくゆくは他人の事も考える事が出来るようになります。

小学4年生とは どんな時期？

今3年生の子もあと数ヶ月で4年生になりますので、4年生の事も少しお話しさせて頂きます。

(1) 干渉を嫌い、 グループでの活動を好む

4年生になると、一人ぼっちや仲間外れなどといったことを嫌い、グループを組んで活発に行動をするようになります。しかしながら、保護者や先生の干渉を嫌い、閉鎖的なグループ活動になりがちです。手に負えないとても難しい時期です。

3年生以降知識欲が旺盛になってきますので、一つの問題に対する問題解決の意識が非常に高まります。問題をどのように解決したら良いか仲間と一緒に計画や手段を考えるだけでなく、そのためのグループ内の役割分担まで自分たちでしっかり計

画します。それは大いに良いことなのに、自分の親の前ではそういった面をなかなか見せない傾向があります。

忘れてはいけないのは、親を突っぱねるような言動をとる割に、半分は親に甘えたい気持ちを持っているということ。甘えたいけれど甘えられないという中途半端な所で行動を起こしてくる。そんな時は、親として言うべき事は言いつて戦うしかないと思っています。しかし、甘えてきたときには余裕をもって甘えさせてあげなければいけません。特に



兄弟が沢山いらつしゃるご家庭は、お兄ちゃんお姉ちゃんに「ちよつと待つて」と言いがちなのですが、それは絶対にダメで、母親を必要としているときは即座に向き合つてあげることが一番かなと思います。やはりたつた5分10分でもお母さんが自分を見てくれたという事は、子どもたちにとつてはとても嬉しいことなのです。子どもが聞いて欲しいと思つている時に聞いてあげないということが重なる、「お母さんは私が何を言つても聞いてくれない」という思いがふくらんで、最悪の状態になつてしまいます。お子さんに声をかけられたときには、お料理をしていようが何をしていたが、是非手を止めて耳を傾けてあげてください。

(2) 好奇心や何かを 成し遂げようとする力が 高まる

興味関心や好奇心の高まりに加えて、体力・気力、そして何かを成し遂げようと努力する力も非常に高まってきます。良く言えば大人になるための脱皮が始まつたということです。いつ結果が出るのか分から

なくても、とにかくがいて必死に葛藤している時期だということが分かつていけば、子どもを頭ごなしに叱ることなく、長い目で見てあげることが出来ます。親が前向きな気持ちで見守つてあげることが大切です。

このように自分で計画を立てて自分で行動し努力するようになる時期ですから、お稽古事や学習面でお尻を叩く絶好の時期でもあります。良い時期であるということを念頭に置いて、甘い辛いを上手に使い分けて子どもを誘導していくことが親の腕の見せどころかなと思います。

習い事は なぜ大切か

(1) 我が家の習い事史

ここで、私自身の子育ての経験談を少しお話しさせていただこうと思います。私の子どもは双子の男の子で、現在27歳です。習い事は二人同時に全て同じものを習わせてきまし



た。
年代順に振り返ってみますと、まず4歳半でピアノを始め、小学校1年生の時にスイミングを始めました。小学校6年生から高校2年生までは空手を習わせました。中学校1年生からはテニス部での部活を始め、中学校2年生から大学入学までいわゆる塾に通いました。

は公開模試を受けたのがきっかけでそのままお世話になることになったという流れです。

(2) 習い事から得られたこと

このように軽い気持ちで習わせたものが多いというのが現実ですが、実際に色々と習わせてみて実に多くの事を学びました。

ピアノは私がピアノ教師ということもあり、子供の成長をみて適時に私自身が教えました。スイミングは体力づくりのために始め、空手に関しては、いざというときの自己防衛の方法や日本の武道の精神を身につけさせたいという主人の強い希望で習わせることにしました。中学校での部活は、「個人ではなく何かチームでやるものをやらせたい」という主人の要望を踏まえて、本人たちがテニス部を選びました。塾

まずピアノから子どもたちが身につけたことは4つあります。毎年のコンクールや発表会への挑戦を通して、継続しなければ何もできるようにならないという継続の大切さが1点目。次に、学校の宿題など毎日の日課の中でいかにピアノの練習時間を確保するかという時間配分をする力が2点目、短い練習時間でいかに練習効果をあげるかという創意工夫をする力が3点目です。最後の4点目は自己管理能力です。例えばテレビが見たくなつてテレビを見てしまふと、その分何かが出来なくなつてしまします。もちろんテレビを見ても良いのですが、その日やるべき事



は全部終わらせなければいけない。そこで何を削るかという、睡眠時間を削るしかありません。それでも良かったら見てもいいよ、と言うわけです。その後見るか見ないかは子ども自身の判断に任せていましたが、大切なのはその日やらなければいけないことの優先順位を自分たちで考えて行動するように常に促すということです。テレビを見て寝不足になつて朝起きられなかったり、授業中に眠くなつてしまつたりという経験をして、やはり自分は何時間は寝なければいけないのだ、ということをも身をもつて知らなければ自己管理はできるようになりません。学校の宿題やピアノの練習など日々やらなければならぬことを限られた時間の中でいかにこなし、いかに遊ぶ時間を捻出するかというのは大きな問題であり、時間とのシビアな戦いなのです。

次にスイミングですが、一回2時間を週に4回、とにかく1回も休まずに練習に通い続けました。年間約10回の大会に出場し続けた結果、5年生・6年生でジュニアオリンピックに出場することができました。5

年生の時は予選落ちでした。子どもたちも大変がっかりして、それから6年生で大会に出るまでの1年間は週4回の練習に加えて週1回特訓の日を設けました。約4時間かけて1万メートルを1回も休まず泳ぎ切るという特訓です。それを1年間続けた結果、6年生の時には全国12位に入ることができました。努力した分だけ結果が出るという事を身に沁みて味わった時期だったと思います。

19時半に水泳が終わった後は、20時過ぎから空手です。空手は最初に自分の姿を鏡に映しながら習います。自分を見つめるということから始まるのです。道場に入る時はきちんと正座をして一礼をしてから入り、厳かな気持ちでひたすら「型」を習う。ですからいつのまにか自分と向き合うこと・自分を守るということ・自己防衛の方法・武道の精神なども身に付けました。最初は嫌々通っていたのですが段々空手の魅力に引き込まれていって、結果的に高校2年生のときに黒帯まで取りました。

やむなく水泳をやめて中学校で入部した学校のテニス部の活動には、日曜日にも食事もしないで一日中テニ

スをやり続けるくらい嵌りました。体が悪くなるのではと心配するほどでしたが、仲間にも恵まれて楽しかったようです。

義務教育の部活は個人技ではなく団体競技としての側面、すなわちチームワークを重視します。試合の時だけでなく日々の練習のときから信頼関係や助け合いの精神を培います。そして試合本番では勝つためにいかに冷静になるか、いかに集中するかといったことを学びます。勝つ・負けるの瀬戸際にあって、周りの応援で自分を奮い立たせている息子の姿をたくさん見てきました。部員の皆さんも、そして大きな大会では保護者の方も、心から応援してくれる。一緒に喜び一緒に涙する保護者の方の姿には、大変感激し感謝しました。団体競技である部活動だからこそ、一つの目的に向かって皆と一緒に歩いていく力、そして他人の事も自分の事のように思える心が育つのだと痛感しました。

このように、習い事の全てが人間形成に大きく影響していると言えるのではないかと思います。私は子育てをしてみて、習い事は本当に大切なものだと実感しています。やはり子どもに何を習わせどのような効果を上げたいかということを考えて、試合やコンクールの結果などに左右されることなく「人づくり」のために習い事を活用していただきたいと思っています。子どもたちが習い事を通して様々なことを学んでいるということとを改めて認識していただきたいです。

学習について

さて、ここまで習い事についてお話ししてきましたけれども、これから「学習」というものについてお話ししたいと思います。小学校で学ぶ教科というのは全部で8教科あります。その内、いわゆる主要教科というのが4教科(国語・算数・理科・社会)、副教科が4教科(音楽・図画工作・家庭・体育)です。

(1)長い目で子育てをする

樹木に例えてみると、幹にあたるのが主要教科であり、葉にあたるのが副教科であると思います。ど

んなに美しい枝振りであつたとしても、やはり葉や花のない木は物足りなく見えますし、新緑の季節になると木々は本当に美しく見えるものです。ですからしっかりと根を張った枝幹を作るのが学習、そこに葉をつけて美しい花を咲かせるのが副教科だと思っています。私たちが子どもを育てる上では、どんな大人に育てていくかという事が一番大切で、やはりしっかりと根を張らせて枝振りの良い幹に育てて豊かに葉を付けさせ、大人になって花を咲かせるような育て方をするのが一番ではないかと思っています。

そのためにも習い事というのは絶対に必要なものです。子どもは長い時間をかけて育てていくものですから、「今現在どうか」ではなく「将来どういう大人に育ってほしいか」ということをいつも念頭に置いていたいただきたいです。たとえばお友達ができて自分のお子さんができないことがあっても、即習得しなくてはならないことでなければ、「いつかあなたも出来るようになるから大丈夫よ」と言っておける余裕が欲しいです。その代わり、今でなければな

らないものには必死に取り組ませます。その判断をきちんと親がしてあげることで人間性の豊かな子に育っていきます。

(2) 家庭学習を通して我が子を知る

「学習」についてさらに細かく見ていきたいと思いますが、私はやはり小学校低学年の時は親が勉強を教えるべきだと思います。早い内から塾に任せてしまうと、我が子が何が分からなくて困っているのか、どこで立ち止まってしまっているのかが分からなくなってしまう、手を差し伸べてあげることができません。そう



ならない為にも、親の分かる範囲を超えてしまうまでは家庭教師になつたつもりで自分の子供の学習を見てあげていただきたい。そうすることによって親子の絆も深まりますし、「お母さんすこいね」と子どもからの信頼を得られる絶好のチャンスにもなります。

実は、同じことがピアノでも出来ます。ピアノは家庭学習なのです。ピアノはいつもおうちの中で、お母さんのいる前で練習します。そうするとどこが弾けていてどこが弾けていないのかが親には自然と分かります。何回も間違えてしまうところを親子で創意工夫して出来るようにしてあげる。こういう練習をしてみたら、この部分だけ練習してみたら、などと声をかけてあげる。それだけでも違ってくる。

ピアノというのは親子で取り組むのに実によく出来ています。取り組んでいるうちに、自分の子どもの性格がつぶさに見られます。粘り強いのか、すぐに諦めてしまうのか、など色々な部分が見えてきます。また、親にとっても我が子を見る洞察力を養い、どのようにすれば子どもがや

る気になるのか、お子さんの性格を見て対処法を学ぶ機会でもあるのです。

(3) 自分でチャレンジできる土台をつくる

小学校低・中学年というのは学習もピアノも、全てにおいて基礎を学んでいる時期です。ですから、いわゆる勉強の仕方・学び方、ピアノなら練習の仕方といったことをしっかり根づかせる、これがこの時期の一番大きな目標です。この土台をきちんと作ってあげると、子どもたちは自然に成長し始めます。土台がしっかりしていると、高学年になっても無理なく授業について行けるのです。

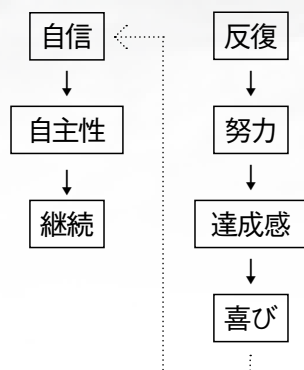
小学校中学年の時期は、スポーツや音楽などで常に目標に向かってチャレンジできる時期でもありません。すなわち、強い精神力と根性を養うことができるチャンスだということです。このような土台のあるお子さんは、大変だと思えることがあっても自ら乗り越えようとする力を自分で培っていますので、あまり勉強しなさいと言わなくても不思議と自

らやるようになります。

学習もスポーツも習い事も、比重は全て同じです。お勉強は頑張つてやらせて、お稽古事は適当で良いという考えはやめて下さい。どちらかと言うと、お稽古事でしっかりと培ったものを勉強に生かしていただきたいと思っています。何事も一生懸命やることを身につけたお子さんはお勉強もしつかりやるものです。

子どもたちが動くサイクル

これは我が子が色々な経験を重ねていくのを眺めているうちに見えてきたサイクルです。一生懸命何度も反復するとある事が出来るようになる。反復して努力をしていると、それが出来たときの達成感が生まれる。そのときの嬉しくてたまらないという喜びが自信に繋がる。自信がついてくると、自分で新たな目標を見つけ、自主的にその目標に向かって継続していく。このサイクルを私の子どもたちは繰り返していたように思います。このサイクルが出来て



きたのは小学校高学年の頃でしたが、こうなってしまうと親も楽になります。ですからこのサイクルが見えるまでは親がしっかり手をかけてやるべきだと思います。親が諦めたら子どもはそこで緩んでしまいますから、土台ができるまで親が頑として頑張る必要があります。

「人づくり」 自信をつけ、自立する

私は子育ての究極の目的というのは「人づくり」をすることだと思っています。そのために大切なことは二つあると思います。

(1) 自信をつけさせる

一つ目は自信をつけさせること。我が家ではピアノ、スイミング、空手と年代を追って色々な習い事をさせてきましたが、後から思えばそれぞれに全て意味がありました。その過程で子どもたちが自ら築いていった先ほどのサイクルをフル活用して学習へと繋げていきました。出来るようにしたかったら、やるしかない。それを子どもたちに肌で感じさせ、その経験をいかにサイクル構築につなげていくかは親にかかっていると思います。

ピアノやスポーツなど、とにかく努力を継続していかなければいけない事を幼いころから続けてきている子というのは、自分がどのくらいやらないと出来るようにならないかというバロメーターを自分で持っています。自分はこの位やらなければダメなのだという、自らの身をもって培ったバロメーターを身体に入れ込ませるのが親の役目です。お友達が100回やって出来たことも、あなたは300回やらないと出来ないかも知れない。そういった時に「自分は300回やる事が当たり前前なのだ」というバロメーターをいかに



に植えつけられるかということです。子どもたちはそのバロメーターが一旦体に備わると、その基準をもって自分で歩み始めます。全ての分野で自主的に行動し始めるのです。そこから先の親の役目は、良い環境を作ってあげること、健康管理をしてあげるといふことにならなければなりません。

そのバロメーターを、子どもがあまり興味をもたない勉強で身につけさせるというのは無理があると思います。そのお子さんが興味を持つ

ているものでバロメーターをつけてあげるのが一番手っ取り早いです。そして身につけたバロメーターを今度は勉強にも転化させることができたなら大成功です。学年が上がって「成績」という現実が身の上に降りかかってきたときに、自分が作ったサイクルと自分で身につけたバロメーターがあれば自ら勉強するようになります。そうすれば親のほうはずいぶん見守っていただくだけで済みます。

(2) 自立させる

もう一つは自立させるといふことです。「自立」とは人の助けを受けなくても何でも自分で出来るということです。そのためには生活体験を豊富に積んでおくことが必要です。

自立への道はまず家庭でのお手伝いから始まります。その次に生活をする上での社会的なルールを知り、それを守るということを学びます。例えばバスや電車の乗り方です。大学受験の会

場に行けばいいか分からない、一人暮らしで自炊を始めてもお米の洗いが分からない。そんなことにならないように、生活体験をきちんと積ませておくこと、それが自立させるということです。その他にも、コミュニケーションを取ること、精神を鍛えること、健康な体をつくること、自信をつけること、こういったことを、小さい頃から情操教育やスポーツで培ってあげることが必要です。

習い事は人づくり 学習は根幹づくり

今までお話してきたことをまとめますと、「**習い事は人づくり、学習は根幹づくり**」であると言えます。私自身の子育てを振り返ってみますと、**小学校は体力づくり、中学校は人づくり、高校は勉強中心**、というスタンスでした。スポーツ少年だった息子たちは、高校に上がって周り

の友達を見て、自分では勉強をやっていると思っていたのに、実は勉強していないに等しかったということに自覚しました。そしてそこからは真剣に勉強するようになりました。高校3年生になると、「勉強って嫌いじゃないなあ」とまで言い出しました。

通の目標に向かって共に歩んでいていただきたい。夢中になれる大好きなものを持っている子というのは、大人になっても人生を楽しむことができます。ですから好きなものをやめさせてしまうのではなく、子どもが楽しんでるそのほほえましい姿を見守って、お子さんの夢に寄り添っていただきたいと思います。そうすることが親としての喜びであり、幸せを感じられる時なのです。

小学校中・高学年になりますと、どうしても塾と習い事を天秤にかけるときが出てくるとは思います。学校や塾の成績だけで判断するのではなく、どういう風に入づくりをするのかということも考慮して判断していただきたいと思います。

しつこいようですが、幼い時は何か一つ限界までとことんやり抜くということを経験させて頂きたいなと思います。うちの子にとってはそれが1万メートル泳ぎ切るという特訓だったわけですが、とことんやり抜くということを小さい頃から教え込むと、体力と精神力を培って行つて、心身共に健康な子に育ちます。これは本当に素晴らしいことなのです。

親は子供の成長全てに責任を持たなければなりません。ですから手を抜かず、そして焦らずお子さんと共

